

アートギャラリー

白 磁
=蘆花浅水荘=

石 田 成 昭



奈野661 高29cm

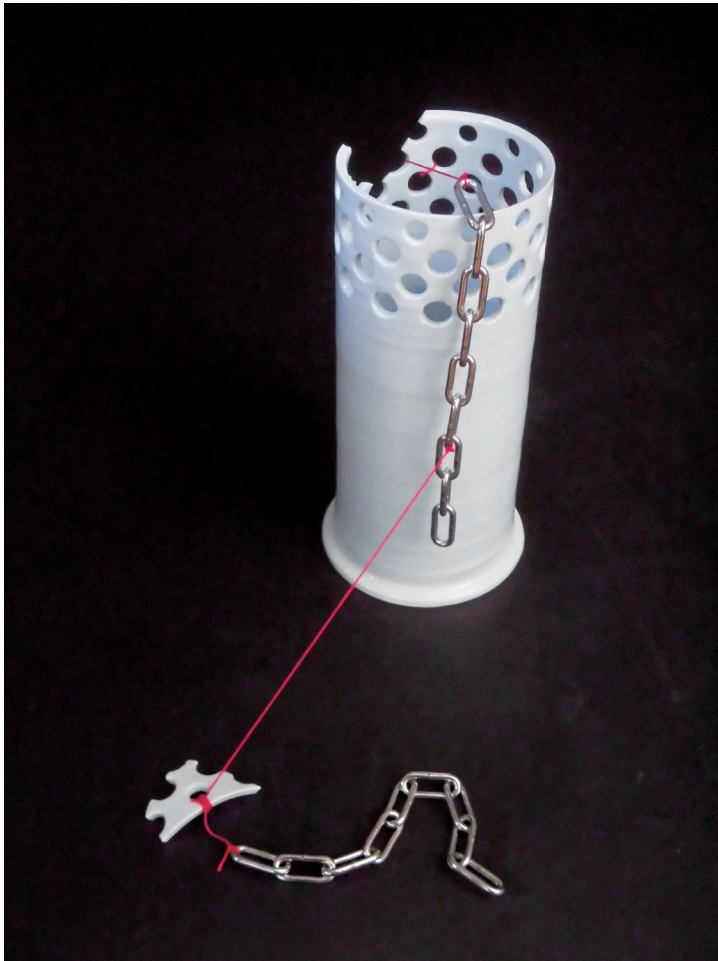
一蘆花浅水荘一

京阪電車・石山坂本線の瓦ヶ浜駅から徒歩5分のところに蘆花浅水荘がある。この館は、明治から昭和初期にかけ京都画壇で竹内栖鳳と並び称され名声を博した円山派の日本画家、山元春挙の別邸兼画室である。一昨年春、春挙生誕150年にあたり大阪市歴史博物館で「蘆花浅水荘と山元春挙画塾」展が開催された。その折に蘆花浅水荘が一般公開されている事を知り早速訪ねてみた。広大な敷地に数寄屋造りの和風建築で今は国の重要文化財に指定されている。檜皮葺の表門は裏千家・今日庵の兜門と酷似し風格のある姿を見せ、折しも桜の花びらがハラハラと散り趣深く印象深いものであった。

1階にこの館の中心となる書院がある。その造りは四方柱の床柱にはじまり落とし掛け、書院窓など表千家・残月亭を参考にしたそうだが春挙のこだわりが至る所に見られ、よくぞここまで徹底したものだと感じる。書院の縁側は畳敷きで5、6間はあろうか、中ほどには1本の柱も無く琵琶湖に面し実に明るく見晴らしが良い。遠くには近江富士を眺める事が出来る。なだらかな築山には松が配され、持仏堂、茶室、土蔵が点在し見事な日本庭園である。創建当時は琵琶湖の水がひかれ舟で直接庭に出入りができ、今もその舟着き場の石段が残っている。私の好みには、茶会に招かれた客が浜大津港からお迎えの舟に乗りこの石段を上り茶室に入ったのではとしたいのだが、残念な事に湖岸は埋め立てられ立派な道路に様変わりし、今やそれは夢の話となっている。それにしてもプライベートビーチとは素晴らしい。

書院の裏手に竹の間がある。その名の通り床の間は云うに及ばず書架、丸窓、煙草盆に至るまで、すべて竹で作られている。清水風外と云う竹細工師が成したものと云う。春挙は竹が大好きで風外を高く評価していたようだ。春挙の描いた墨竹図の襖に、風外が制作した竹製の雀の引手が付けられている。両者はお互いを称え合い共同制作に取り組んだのだろう。竹の根、節、枝等を巧みに取り入れた細工は大変特異なもので、竹といえば竹籠のイメージがあるが、このような竹もあるのだと初めて見る私には驚きであった。和楽器もあり三味線などはどのような音色が出るのだろうか。

2階に洋風の応接間と画室がある。画室は20畳はあろうか、格天井がより一層広く感じさせる。出世作の『法塵一掃』の下絵が掛けられている。その横に1枚の未完成の絵がイーゼルに立てかけてあり、春挙が使用した刷毛、絵筆が、又キャビネットには岩絵の具がそのまま残されている。「イヤー、ドウモドウモ」と云い



奈野661 高29cm

ながら春挙が不意に飛び出してきて、又絵筆を取っても全然おかしくない雰囲気である。

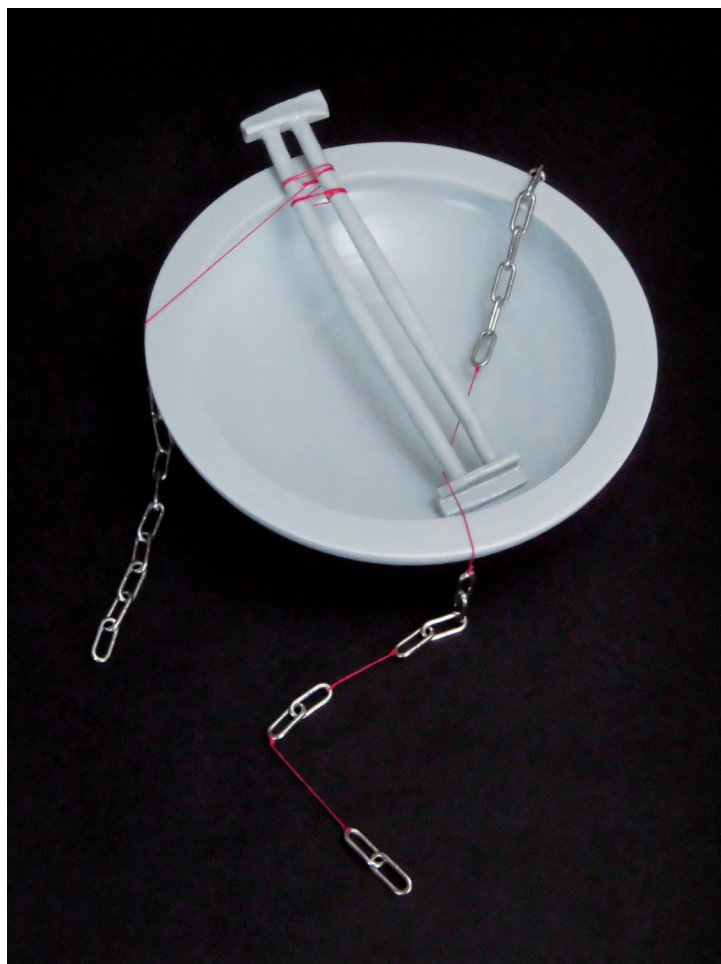
春挙は多くの画塾生を育てたが膳所焼の復興にも大きな功績を残している。膳所焼は江戸時代御用窯として作られ、茶陶として名高く遠州七窯のひとつである。いつだったかあるお茶席で膳所焼の飴釉の掛かった水差しを見る機会があった。それは控えめで上品な佇まいを見せ、これが遠州好みの「きれいさび」なるものかと見入ったことを覚えている。明治維新で途絶えていたが、春挙の支援を受け岩崎健三が京焼の2代伊東陶山の指導のもと再興し今に至っていると云う。膳所焼の窯元は浅水荘のごく近くにあり春挙自身が出向き絵付けを楽しんだようだ。膳所焼美術館にその作品が残っている。春挙は絵画はもちろんのこと竹工芸、陶芸など多くの芸術家を支援し京都・鷹峯の光悦村の様な芸術村を作りたかったのだろう。大津・膳所の偉大なアートプロデューサーに合掌

蘆花を手し 舟を漕ぎ出で 望む富士
竹も陶器も 春挙好み

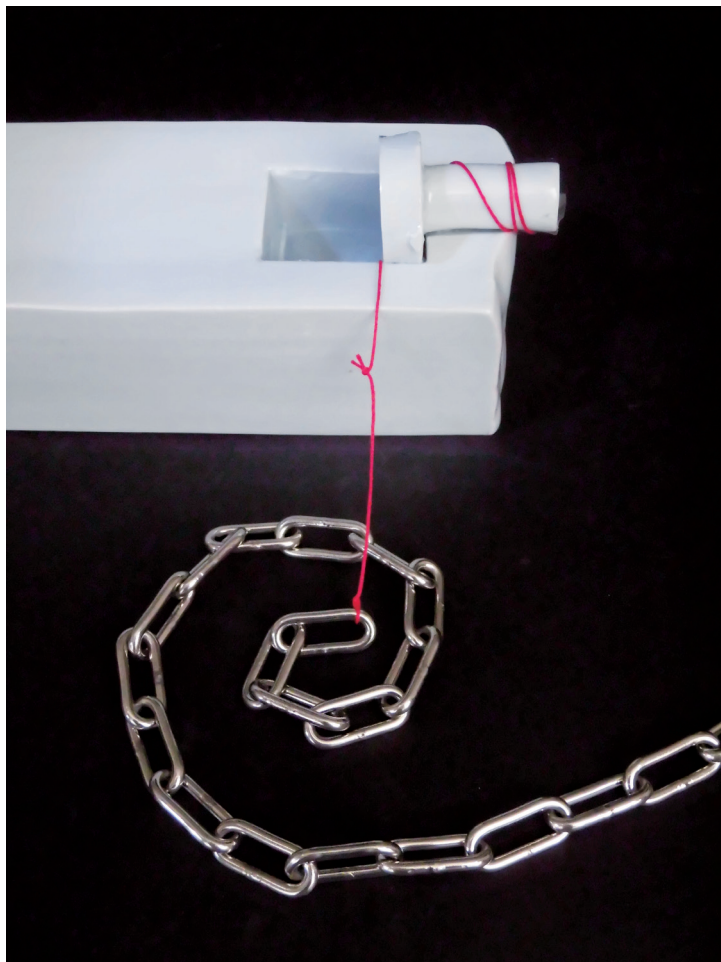
因みに春挙の画塾生の中では柴田晩葉の絵が私の好みである。



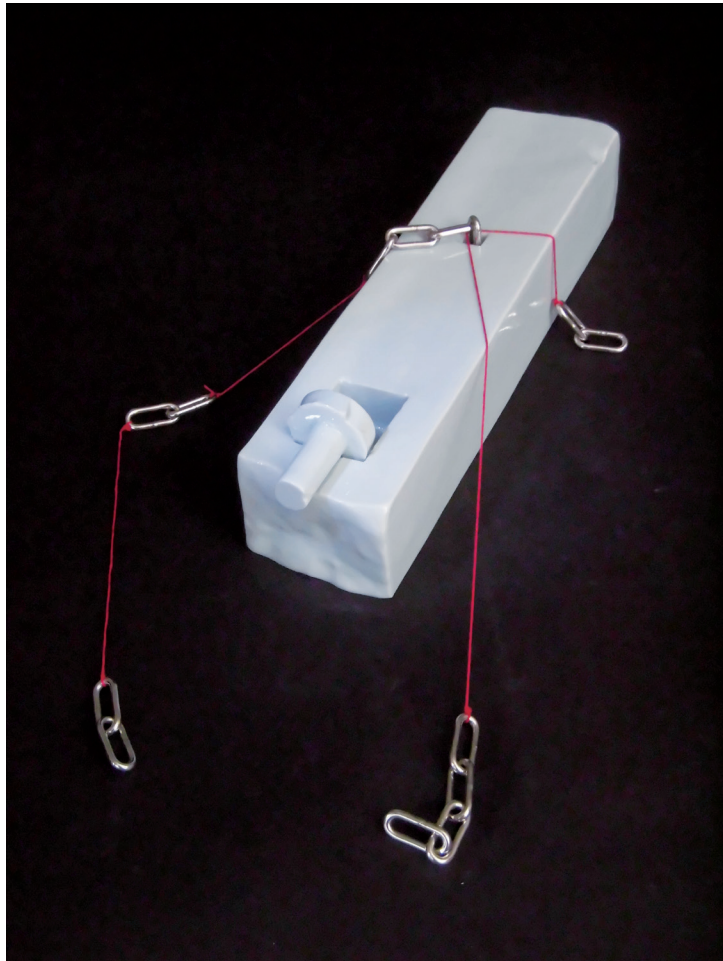
奈野 6 6 2 高 10cm



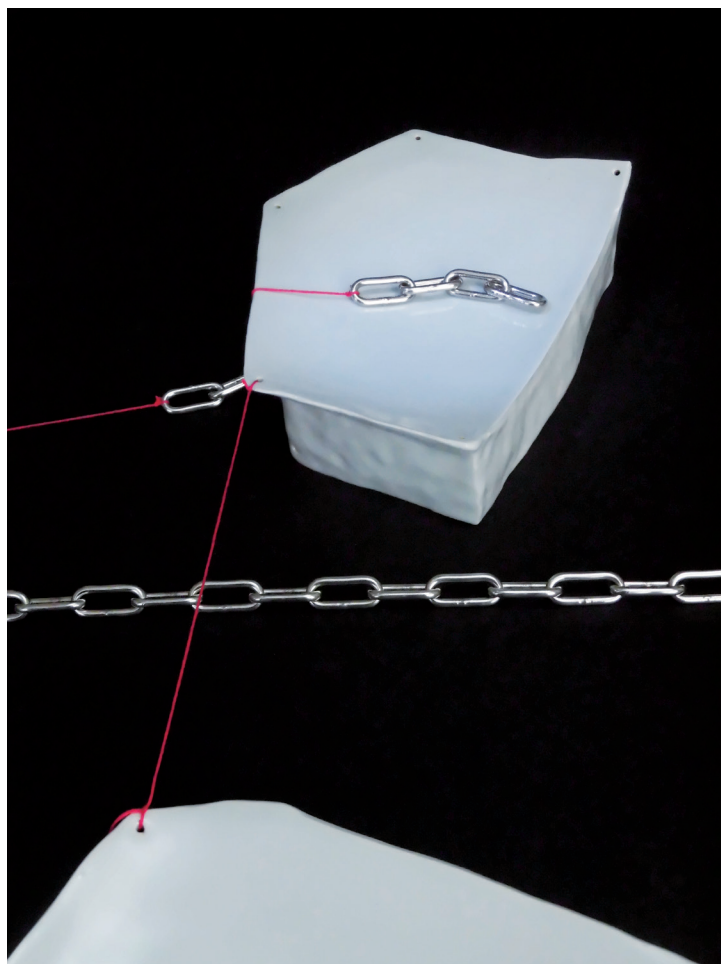
奈野 6 6 2 高 12cm



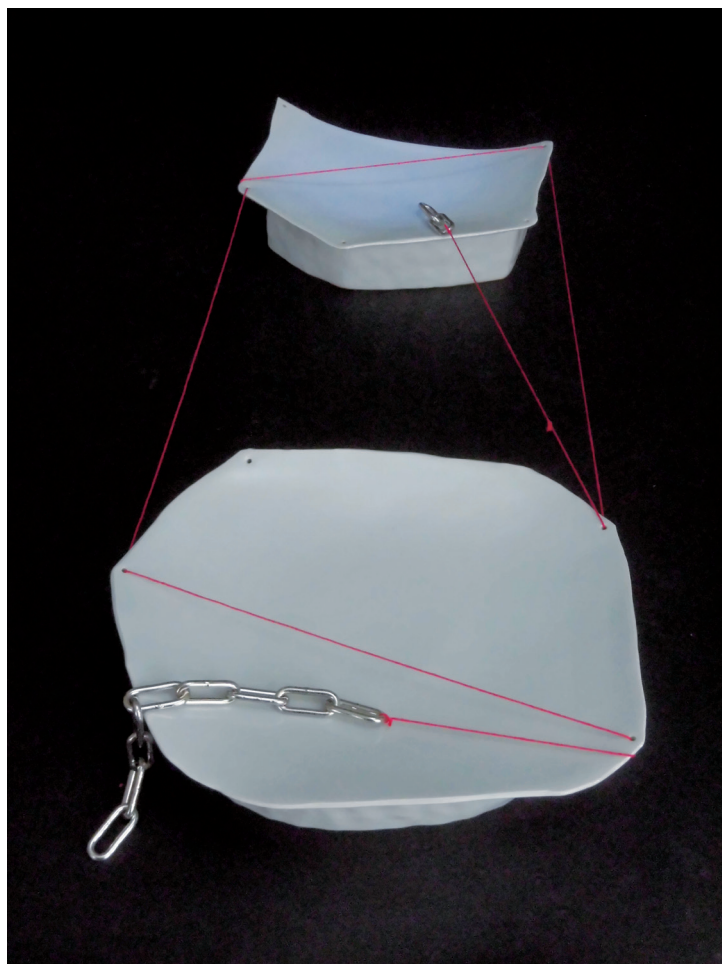
奈野663 高10cm



奈野 6 6 3 高 10cm



奈野664 高6cm



奈野 6 6 4 高 6cm